

佐伯啓思著「学問の力」ちくま文庫、筑摩書房 2014年12月10日刊を読む

- I ○学問のあり方は、今日の日本社会のあり方と無関係ではない
- 「学問」とは「さまざまな観察の結果でてきた知識」というより、「そのような知識を抽出しようという態度や関心そのもの」
- ・何か「昆虫採集でもするように社会や歴史についての知識を集めること」ではなく、「社会にかかわり生を送り、それなりの価値観を見出す前提となる態度や関心」
 - ・ただ「知識を獲得すること」ではなくて、「社会に生きていくことを前提として、自己や人間や社会や歴史とは何かという認識にかかわる営み」
- *ここでいう「学問」とは、物理や化学のような「自然科学」ではなく、「社会科学」や「人文科学」それに「思想」といったものに限定します
- 学問とは、「客観的な知識」ではなく、「知識へ向かう態度」
- ・学問や知識は、決して国籍を持たないわけではなく、その国や社会のあり方を反映
 - ・日本の学問や知識のあり方が、逆に、ほかならない日本という国や社会を動かしていく
- 専門家
- ①本来、ある条件の下で、ある角度から見ると次のようなことが言えるという限定的な発言をする人
 - ②「ある一定の条件の下で、ある角度からすればこういう結論になる」というだけ。「一定の条件の下で得られたデータを提供するだけ」
 - ③「一定の条件の下で成り立つ限定条件付の結論」を述べるにすぎない
 - ④専門家は、社会の大きな問題について発言する場合には、自分が社会のどの側面について発言しているのかを知っていなければならない
 - ⑤「群盲、象をなでる」…象をなでている限りは、自分が象をなでているという自覚がなければならぬ。自分がなでているのは象のどの部分かを知らなければならない
 - ⑥ **だれか**が象の全体像をさし示さなければならない
 ↳「知識人」。物事を総合的、全体的に見て、そこに自分の思想や考えを表明するもの
- 「思想」とは、「思い」かつ「想像」すること
- …何か重要なことへいたる道筋を考え、創造する行為そのもの。そうした行為を行う基準。真理へ向かおうという姿勢がなければ思想とはいえない
 - …他者に向けて言葉を発し、他者の考えに向き合うことが必要。自分とは考えが違うものと対話する。内的な対話をする。そうすることによって、自分の思想、考え方の軸が正しいかどうかを反省。そういう契機・回路が思考の中になれば「総合化」「統合(インテグレーション)」は不可能
- 「統合(インテグレーション)」に必要なのは「思想的基盤」、つまり「自分が置かれている状況」と「自分の立場の方向」についての「自覚」
- ・社会にかかわるには「価値」がいる。「価値」を表示し、掲げるには「思想」がいる

○教養

(1) 「岩波文庫はとにかく全部読む」

- ・自分の生き方と、古典的な教養としての知識を結び付けるという姿勢。ある程度まで共通に読まれるべきものがまだあった。そういう本について、友達のあいだである程度の議論が成り立っていた
- ・人類の共有財産のうえにそれなりに安心して乗っかっているという思い

(2) ①いろいろなものを読みながらも、結局は、ひとつの問題をずっと追っていく

②ひとつの問題をめぐって展開される巨大な思考の連続

- ・この世の中を構成している原理・法則は何か
- ・その真理性はどこにあるのか
- ・それを認識するというのはどういうことなのか
- ・それを認識することによって人間は変わるのか
- ・人間はそういう世界像を変えることができるのか

(3) ①自分が何かを考えるとときに参照(レファランス)することができる思想的な軸・基盤を獲得する

②「思想」とは、ひとつの問題をめぐって多くの人が多様な思考をめぐらしてきた「流れ」のこと

③どのような考え方にのっかって自分なりの流れを作るのか

○思想の歴史(思想史)

例えば「西欧思想史」では何をめぐって多くの人が論争し、それに対してどんな回答が与えられ、その回答に対して次の思想家がどういうふうに応答したのか、「流れ」として捉えることが重要

- ・われわれがそれぞれの立場から西欧を舞台にした大きな思想の流れを解釈する余地はまだある

II 「知ること」と「わかること」

○「ものを知る」ということは、「その国の文化」と深くかかわっている

- ・日本的な美意識や日本的な文化がわからなければ、数学も文学も成り立たない
- ・日本の美や文化の核心にあるものはいったい何か
- ・日本人が創造的な仕事をなしうるとすればどうにかたちでできるのか
- ・「数学さえ、その国の文化や美意識と決して無関係ではない
- ・文化のセンスや美意識がなければ数学などできない(岡 潔^{おかきよし})

○たとえば数学ができるためには、その国の文化がしっかりしていなければならず、文化と不可分なその国の言葉、つまり「国語」がしっかりしていなければなりません。「国語」への感受性、愛着。それを大事にしようという感性がなければ、数学というグローバルな抽象的学問もうまくいかない

○この「国語」のもうひとつ先にあるものは「こころ」というもの。「こころ」という日本独特の観念が、文学はいうまでもないことですが、数学のような知識においても不可欠

○「教養」はその国の文化と深くかかわってくる

- ・日本人が教養をもてるかどうかは、「日本文化の質の問題」になってくる
- ・日本にわれわれの感性を育てるような文化的な営為があるのか、ないのか、それをわれわれが身につけているのかどうか、そのことが非常に大きい

○「わかる」

- ・わかるというのは個人の才能や資質だけの問題ではありません
- ・われわれは潜在的に自らの感受性を方向づける何かを手に行っている
- ・ある事柄と、その方向が合致したときに、われわれは腑に落ちると感じるのだと思います
- ・ですから、受け皿になる感受性というものがそもそも育っていないのに、いろいろと本を読んでも本当に面白いはずはない

○「平家物語」を読んでいなくても、誰もがあの冒頭の一節、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす～」を知っている

- ・そうすると、その一節に示されている「無常観」のような感覚は、誰もがどこかに持っています。そういうものがベースにあると、感受性の方向性が定まってくるわけです
- ・そうすると、文明の盛衰といった歴史観に共鳴するところが多く、たとえば、「ローマ帝国衰亡史」を読んでも面白いし、西洋文化に対する自分なりの見方というものも出てくる

○ある種の「感性を生み出す土壌」のようなものが、「その国の文化」と非常に深くかかわっている

- ・それは、日常の繰り返しのなかからいつの間にか感覚として埋め込まれてしまうような無意識のもので、マイケル・ポランニーなら「暗黙知」とでも呼んだようなもの

○少年時代の夕暮れの情景、ぽつぽつと点く明りと、夕食の支度の匂い、こうしたものが無意識のうちに感受性の土壌を調べていく。それがあってはじめて「教養」というものが意味をもってでてきます

- ・自分の「感受性」に見合ったものとしての、そしてまた、その「感受性」を育てるものとしての「教養」です。
- ・プラトンやヘーゲルをわれわれが読むとすれば、あくまでもわれわれの時代背景と日本という社会的な状況の中で読むのです。日本人は、日本的な感性に照らしてそれらの本(プラトンやヘーゲル)を読み、その知識を身につけるのです
- ・そして、その感性を育てるものは、われわれの幼少期からの経験の質であり、みてきた風景であり、家族やその他の人間関係にほかなりません。「日本的なもの」への関心も、こうした感性のあり方と無関係ではありません